
SS

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SS

【Nコード】

N44180

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

ツイッターノベル、ブログで書いたSSシリーズです

【火葬場で骨を砕く】

火葬場で骨を砕く。白い小さな壺に押し込むために。

焼かれても死んだと実感できなかった人の骨を砕くのに、少し力が必要だった。骨を砕くなんて初めてだし、熱いし、慣れない長い箸でおぼつかない手つきながら骨を砕いてつまんで、壺に入れた。

でも一回やったら要領がよく分かって、私は次々と壺に入れた。頭蓋骨を箸の先をぐりぐりと押しつけて潰した。白く長い骨は四分割にして壺に入れた。周りの人間はあっけにとられた顔で私の流れ作業を見つめていた。

頭の中は冷えていた。掌と額の汗は止まらなかった。

……骨になったその人が死んだ実感は湧かない。ただその人を私は恨み、感謝し、その人がいなければ生きていけない自分を呪っていた。

届けられない気持ち、ぶつけられない言葉は、石ころになってのどに詰まっていた。もう何もかもが遅い、吐き出す事すらむなしい感情。私は思い切り箸に力を込めた。

「I was born」

今でも呼んだら骨の人は笑って私を見てくれるのだろうか。

それとも面倒くさそうに、私の伸ばした手を払いながら渋い顔をするのだろうか。

きっと死ぬまで分からない。どこにも答えなんてない。

それなのに、思えば想うほど重いと分かっているのに、子供の私は「答え」という絶望と奇跡を、骨の人のいない世界で探している。

【花葬刑】

花に沈んでいくあの子。うらやましいなんて言えなかった。終われるってすばらしい。

紅い薔薇、黄色い薔薇、白い薔薇、黒、紫の薔薇や花びらが天窓を通して舞い落ちてくる。

むせかえり、頭痛が止まらない程に濃密で豪勢な香りに包まれながら、私は網状の床に転がっていた。薔薇のツタを模した、とげ付きの鎖に両腕、両足を縛られながら。

今日は私の処刑日、だそうだ。

父がこの国の女王に逆らって一族もろとも処刑されることになった。国民が疲弊するほどの贅沢癖を咎めたそうだ。父はさつき窒息死した。母は一週間前に窒息死した。

薔薇の豪勢な香りに混じって、かすかに肉の腐る臭いがした。

豪勢な処刑台だ。何層もある網状の床の檻に薔薇をどんどん落として窒息させていくのだ。

下からどんどんと埋まり、怯えた声、耳が痛くなるほどに悲痛な声が聞こえてきた。

少しづつ女王はいたぶって、私たちを、一族丸ごと、殺したかったのだろう。

ここはそういう設定なのだ、大義名分がきちんとある。

あはは。本当可笑しい。

これで満足かな、女王様。いえ、女王様の私。窒息する前に嗤い転げて死んでしまいそうだった。

薔薇の雨は女王様の憎悪。お父さん、お母さんと叫ぶ声
降り止まない憎悪と声は、鮮やかで奇麗で、いたいたしい。
ねえ。私が私を殺して、どう思う？

生きるすばらしさを説くのなら、たくさん死んでいく私をどうか救
って。薔薇に埋もれる前に、早く早く。無理だと分かっているけど。
願うのは自由でしょう。手前勝手だけだね。

夢を見た。

気持ち悪い夢。顔は違うけど、二人の私が争っている。

奇麗なドレスを着た私は生きるために死んでよと声を上げていた。

ひとりは嗤った、ひとりは自分の胸にナイフを突き立てているのに
死ねなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4418o/>

SS

2010年10月22日03時25分発行